

Duecento イタリア語における participio assoluto と gerundio assoluto

—— Novellino を中心として ——

古 浦 敏 生

〔序 論〕

§ 1. Duecento とは？

Duecento (或は, Dugento) とは, 元来「200」を表わす数詞のことであるが, これは, 通常「A・D・1200年代」, 即ち, 「13世紀」の意味でも用いられている。但し, もっと正確には Migliorini,¹⁾ Bの定義に従わねばなるまい。彼は, Duecento を「1225年から1300年まで」としている。1225年は, イタリア俗語として初めて芸術性を備えた作品 *Cantico del Frate Sole* (「太陽讃歌」または「創造讃歌」) が San Francesco d'Assisi (1182~1226) によって作られた年である。そして, このイタリア俗語を「イタリア語」として確固たるものにしたのが Dante Alighieri (1265~1321) の名作 *Divina Commedia* 「神曲」なのであるが, この作品の執筆開始は1307年とされている。従って, Duecento とは「太陽讃歌」から「神曲」の出現以前の時代を指し, この時代は, まだ言語的に混沌たる状態にあったのである。

§ 2. Novellino について

Novellino (作者不詳) は, *Le cento novelle antiche* 「古譚百種」とも云われ, Duecento イタリア語の散文としては代表的なものである。これは, 表題からもわかるように, 100種の説話が収録されたものであって, 後に Boccaccio, G. の *Decamerone* に多大な影響を与えたコミカルな作品である。

筆者は, Novellino のテキストとして次のものを利用した。Novellino e conti del Duecento, a cura di S. Lo Nigro, U.T.E.T., 1968, Torino; *Il Novellino, testo critico, introduzione e note*, a cura di G. Favati, 1970, Genova; *La prosa del Duecento*, a cura di C. Segre e M. Mati, Riccardo Ricciardi Editore, Milano-Napoli.

§ 3. 本稿の目的

筆者は, ラテン語からイタリア語への言語変遷を主たる研究テーマとし, これまでに現代イタリア語研究 (特に冠詞のシンタクスの研究), ダンテ「神曲」の言語研究, 古典期のラテン語 (特に, ダンテに多大な影響を及ぼしたウェルギリウス「アエネイス」の言語) の研究を行ってきた。そして, これらの時代間の関連性を明確にするために, ここ数年来, Duecento イタリア語の研究を押し進めている。²⁾

具体的には, Duecento イタリア語の作品のうち, その代表的な散文の1つである Novellino において, participio assoluto と gerundio assoluto の構文 (これに関しては後でくわしく説明する。) が現代イタリア語とは異なった様相を呈している点に着目し, 以下, その特色を分析・記述することを本稿の目的とする。

〔本論〕

第1章 participio assoluto と gerundio assoluto — その用法と史的考察

§ 1. 従来の諸研究

まず、ここでは、Duecento イタリア語における participio assoluto と gerundio assoluto(以下、両者を合せて便宜的に「絶対分詞構文」と名付けることにしよう)の用法について述べねばならないのであるが、残念ながら、Hall, R.A. Jr. 著「イタリア言語学文献集」³⁾を見ても、このことに直接関係のある文献は載っていない。また、イタリア古語文法書として定評のある Wiese, B.: *Altitalienisches Elementarbuch*, 1928, Heidelberg の中には "Absolutes Partizipium 「絶対分詞」", "Das Gerundium an Stelle eines absoluten Partizipium 「絶対分詞の代りをするジェルンディオ」" という項目が見られるのであるが、これは、用例の箇所がわずかばかり示されているだけの不十分なものである。但し、やや時代は降るが、Boccaccio, G. (1313-1375) に関しては Herczeg, G.: *Il gerundio assoluto nella prosa del Boccaccio 「ボッカッチョの散文における絶対ジェルンディオ」* *Lingua Nostra*, vol. 10, 1949 という論文がある。けれども、彼の論文は gerundio assoluto の意味論的分析を試みたものであって、本稿のテーマである「gerundio assoluto と participio assoluto との間の勢力関係」を扱ったものではない。

従って、本稿では、現代イタリア語における絶対分詞構文の用法を手掛りとして論を進めることにしよう。

§ 2. 現代イタリア語における絶対分詞構文の用法

まず、Gabrielli⁴⁾ A. が指摘しているように、participio assoluto には現在分詞が用いられる場合と過去分詞が用いられる場合の2種類がある。前者の場合はその意味が能動であり、後者の場合(尤も、それは他動詞の場合に限られるのであるが)はその意味が受動である。例えば、Regnante Carlo VIII, il popolo si ribellò. 「カルロ8世が支配していた頃、人民は服従しなかった。」(下線部は participio assoluto. regnante は現在分詞。意味は能動); Calata la tela, tutti applaudirono. 「幕が降された時、彼等は皆拍手した。」(calata は他動詞の過去分詞。意味は受動)。ここで注意すべきことは、現在分詞の regnante をジェルンディオの regnando に置換えてもその意味は全く変らないことである。即ち、Regnante Carlo VIII, il popolo si ribellò. も Regnando Carlo VIII, il popolo si ribellò. もともに同じ意味である。

次に、Migliorini⁵⁾ B. が云うように、この構文は絶対構文であるので、この構文中の主語は主文の主語とは異ならないなければならない。即ち、"Il gerundio si può usare assolutamente, cioè con un soggetto proprio, diverso da quello del verbo principale. 「ジェルンディオ〔分詞に関して同様である。〕は、絶対構文においても用いられる。即ち、主文における動詞の主語とは異なる固有の主語を伴って用いられるのである。」(下線筆者)

さらに、Migliorini⁶⁾ B. は、"Il latino si serviva con molta frequenza di queste costruzioni assolute (e le metteva all'ablativo). In italiano sono frequenti solo quelle con il participio passato; le costruzioni con il participio presente sono solo del linguaggio

antiquato o sostenuto. 「ラテン語では、この絶対構文(これは奪格に置かれた)が非常にしばしば用いられた。イタリア語では、過去分詞を伴う絶対(分詞)構文のみ使用頻度が高い。現在分詞を伴う(絶対分詞)構文は、昔風の堅苦しい表現に属する。」⁷⁾
(下線筆者)と述べている。

また、これらの絶対分詞構文内の語順の問題、即ち、主語と分詞(またはジェルンディオ)との位置関係について、Goidanich⁷⁾; P.G. は次のように述べている。"Il participio è sempre preposto al sostantivo; col pronome si può preporre o posporre." 「(絶対分詞構文内の)分詞(またはジェルンディオ)は、(その主語となる)実詞に常に先行する。但し、(主語が)代名詞である場合には、分詞(またはジェルンディオ)は、代名詞に先行しても後置されてもよい。」⁸⁾ つまり、Lui vivente, --- 「彼の存命中は」における代名詞 lui は分詞の後に置かれても構わないのである。

§ 3. 絶対分詞構文に関する史的考察

participio assoluto は、ラテン語のいわゆる ablative absolute⁸⁾(「絶対奪格」または「奪格別句」)の名残りであろうと思われる。この絶対奪格は、イタリア語に限らず、他のロマンス諸語にも広く受継がれた。このことは、Meyer-Lübke⁹⁾; W. も指摘しているとうりである。例えば、ラテン語の Quo facto profectus est. 「それが行われて後(=それを行なって後)、彼は出発した。」は、イタリア語では Cìò fatto partì. フランス語では Cela fait il partit., スペイン語では Esto hecho partió., ポルトガル語では Isto feito partiu. と云われる。

非常に使用頻度が高かったラテン語の絶対奪格は、上述のようにロマンス語全体に受継がれたのであるが、このうち現在分詞を伴う絶対分詞構文は、やがてその勢力を減ずる運命にあった。それと云うのも、現在分詞は、かつての動詞としての機能が薄れて、単なる名詞(例えば amare 「愛する」の現在分詞 amante は、「愛人」という名詞となっている。)や形容詞(例えば acqua bollente 「煮立っている水」=「熱湯」における bollente は、もはや形容詞として用いられている。)等になってしまったのだから。このような衰退の終着点として、イタリア語では、元来現在分詞であったものが遂には前置詞や接続詞と化してしまった場合があるのである。このことについては、Rohlf¹⁰⁾; G. が次のように述べている。"Relitti di tal costruzione sono durante la guerra, nonostante il freddo, mediante la sua fantasia." 「このような構文(=絶対分詞構文)の名残として、durante la guerra 『戦争中に』(『戦争が続いている間』に由来), nonostante il freddo 『寒さにもかかわらず』, mediante la sua fantasia 『彼の想像力によって』が挙げられる。」¹¹⁾

これに対して、gerundio assoluto は、古典期のラテン語には存在しなかった表現であり、Herczeg¹¹⁾; G. も指摘している如く、ロマンス語内での革新的な現象であろうと思われる。(尤も、このことに関しては、いろいろ議論が為されている。)但し、この構文も現代イタリア語では衰退している。

第2章 Nevellino における絶対分詞構文

さて、ここでは、前章 § 2 で述べた現代イタリア語における絶対分詞構文の用法に対して、Novellino におけるその用法がどれ程異なっているか? という点に注目したい。

§ 1. 絶対分詞構文の用例

(1) ここでは除外して考えるべき用例

(i) 一見絶対分詞構文のように見えても、その主語が主文の主語と同一である場合。

例えば、*La volpe andando per un bosco, si trovò un mulo.* 「キツネが森を歩いていると、ラバに出会った。」(第94話)においては、主文の動詞 *trovò* の主語も *la volpe* 「キツネ」である。前章 §2 で Migliorini, B. が指摘している如く、絶対分詞構文中の主語は主文の主語と異ならないので、この種の例は不採用とする。

(ii) 絶対分詞構文中の主語が省略されている場合。

例えば、*Andando (lo 'mperadore Traiano の略) un giorno con la sua grande cavalleria contra suoi nemici, una femina vedova li si fece dinanzi.* 「(皇帝トリアヌスが) 或る日、大騎兵隊を率いて敵に向かって進んでいた時、1人の未亡人が彼の前にやって来た。」(第69話)。この場合は、たとえその省略された主語が主文の主語と異なっていようと、採用しないことにする。

(2) 主として取扱うべき用例

(i) 現在分詞が用いられる場合

Poco tempo passante, vi cadde un suo figliuolo. 「わずかな期間が過ぎて後、彼の息子がそれ (= 罪) に陥った。」(第15話), *E veggente tutta la gente, la si spogliò.* 「そして、すべての人々が見ているところで (= 公衆の面前で)、彼女はそれ (= その衣服) を脱いだ。」(第26話), 他5例。

(ii) 過去分詞が用いられる場合

Così il consumò di mangiare, ricevuto il fumo. 「このようにして、湯気が受取られて後 (= 湯気がパンに浸み込んで後)、彼はそれ (= そのパン) を食べ尽した。」(第9話), *Passato il verno, tornarò i tre cavalieri a la cittade.* 「冬が過ぎて後、3人の騎士達は町へ帰った。」(第41話), 他7例。

(iii) ジェルンディオが用いられる場合

Un giorno di lunedì un cuoco saracino ch' avea nome Fabrat, stando alla cucina sua, un povero saracino venne alla cucina con uno pano in mano. 「ある月曜日のこと、ファブラットという名前の回教徒の料理人が台所に居た時、1人の貧しい回教徒が手にパンを持ってその台所へやって来た。」(第9話), *Saladino, lo quale era uomo di corte, essendo in Sicilia un giorno ad una tavola per mangiare con molti cavalieri, e davasi l'acqua.* 「宮廷人であったサラディーノが、ある日、シチリアで多くの騎士達と食事をするためにテーブルに着いた時、(手を洗うための) 水が出された。」(第40話), 他21例。

(3) 用例の数に関する考察

ここで、上記(2)の (i)(ii)(iii) にそれぞれ該当する現在分詞、過去分詞、ジェルンディオの使用頻度を表にしてみよう。

この表からわかるように、過去分詞を伴う絶対分詞構文のみ使用頻度の高い現代イ

絶対分詞構文の構成要素	例の数
現在分詞	7
過去分詞	9
ジェルンディオ	23

タリア語（第1章§2のMigliorini, B.の説を参照。）と異なり、Novellinoでは、現在分詞も過去分詞とほぼ等に現れる。そして、ジェルンディオの使用頻度が前2者と比べてかなり高いこともその特徴の1つであろう。

ラテン語の絶対奪格構文の構成要素とはなり得なかったジェルンディオが、何故Duecento イタリア語の絶対分詞構文において使用頻度が高いのか？ということであるが、この時期には既に現在分詞の動詞としての機能が弱まっていて、それを取って替る勢力としてジェルンディオが台頭してきたのではないだろうか？その証拠として、Duecento イタリア語では、現在分詞とジェルンディオとの間にゆれがしばしば見られるのである。

§ 2. 絶対分詞構文内での語順について

ここでは、絶対分詞構文内での主語Sと動詞V（即ち、現在分詞または過去分詞またはジェルンディオ）との間の位置関係について調べてみよう。

まず、Goidanich⁷⁾, P. G. が指摘しているように「主語が代名詞である場合は、分詞は主語に先行しても後置されてもよい」のであるから、主語が代名詞の例は、ここでは取除いて、次のような表を作成することにしよう。

この表によれば、「絶対分詞構文内では、過去分詞が主語よりも前に置かれた場合（V-S型）は7例、主語よりも後に置かれた場合（S-V型）は1例であった。」等のことがわかる。第2表を解釈すると、「過去分詞が用いられる場合は圧倒的に過去分詞が主語より前に置かれるが、現在分詞・ジェルンディオが用いられる場合は、どちらが前に置かれるか？その判定がむづかしい¹²⁾」ということになる。

絶対分詞構文の構成要素	V-S	S-V
現在分詞	3	3
過去分詞	7	1
ジェルンディオ	13	6

この結果は、Goidanich⁷⁾, P. G. が指摘した「絶対分詞構文内での分詞（またはジェルンディオ）は、（その主語となる）実詞に常に先行する。」という現代イタリア語に関する事実とは異なっている。

§ 3. 絶対分詞構文の長さについて

次に、絶対分詞構文の長さを調べるために、その語数（但し、冠詞は名詞や前置詞と融合するので計算に入れない。）を数えてみよう。

絶対分詞構文の構成要素	語数																				計
	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20		
現在分詞	3	3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	
過去分詞	6	1	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9	
ジェルンディオ	1	2	1	1	0	3	2	2	1	0	3	4	0	1	0	0	1	0	1	23	

この表からは、「絶対分詞構文全体が2語からなる場合、現在分詞を伴った例が3例、過去分詞を伴った例が6例、ジェルンディオを伴った例が1例であった。」等のことが

わかる。第3表は、「現在分詞・過去分詞を伴った絶対分詞構文は比較的短かいが、ジェルンディオを伴った絶対分詞構文は比較的長い。」と解釈できよう。

〔 結 論 〕

以上、Duecento イタリア語 — 特に、その代表的な散文の1つとされるNovellinoにおける絶対分詞構文(participio assoluto & gerundio assoluto)について考察してきたが、最後に、本稿で明らかになった事実を列挙しておこう。

- (1) 過去分詞を伴う絶対分詞構文のみ使用頻度が高いとされる現代イタリア語と異なり、Novellinoにおいては、現在分詞を伴う絶対分詞構文も過去分詞を伴うそれもほぼ同等に現れる。そして、ジェルンディオを伴う絶対分詞構文の使用頻度は、前2者よりもはるかに高い。
- (2) 絶対分詞構文内での語順について述べると、現代イタリア語では分詞(またはジェルンディオ)がその主語となる実詞に先行するのが通則であるが、Novellinoでは、過去分詞が用いられる場合には圧倒的に分詞がその主語に先行するが、現在分詞・ジェルンディオが用いられる場合にはどちらが先行するか?その判断はむづかしい。
- (3) Novellinoでは、現在分詞・過去分詞を伴う絶対分詞構文はその構文全体の長さが比較的短かく、逆に、ジェルンディオを伴う絶対分詞構文はやや長い傾向がある。

注

- 1) Migliorini, B.: Storia della lingua italiana, 1961, Firenze
- 2) 拙稿「Duecento イタリア語研究序説 — 『テゾレット』 & 『ノヴェッリーノ』における動詞を中心として」(関本至先生御退官記念論集, 1976, 広島大学言語学会機関誌「広大言語」第15号別冊)
- 3) Hall, R.A.-Jr.: Bibliografia della linguistica italiana, vol.1, II, III, 1958, Firenze; Primo supplemento decennale (1956-1966), 1969, Firenze; Bibliografia essenziale della linguistica italiana e romanza, 1973, Firenze.
- 4) Gabrielli, A.: Dizionario linguistico moderno, 1961, Milano, p.459
- 5) Migliorini, B.: La lingua nazionale, 1963, Firenze, p.200
- 6) Migliorini, B.: (注5)のもの, p.199。
- 7) Goidanich, P.G.: Grammatica italiana, 1967, Bologna, p.188
- 8) 絶対奪格構文中に割り込む主文の要素に関しては、拙稿「ウェルギリウス『アエネーイス』における独立奪格に関する一研究」(広島大学文学部紀要, 第34巻, 1975, P.P.330-345)を参照されたい。
- 9) Meyer-Lübke, W.: Grammatik der romanischen Sprachen, Band III, 1972, Hildesheim-New York, p.59
- 10) Rohlfs, G.: Grammatica storica della lingua italiana e dei suoi dialetti, vol.III, 1969, Torino, p.112
- 11) Herczeg, G.: Il gerundio assoluto nella prosa del Boccaccio,

(Lingua Nostra, vol.X, 1949)

- 12) 頻度間に有意差があるか否かを定める客観的な方法として、5%の危険率を伴うカイ2乗検定を用いた。

付 記

本稿は、日本ロマンス語学会第12回大会(1976年6月13日、於東京、国際文化会館)で口頭発表した内容を改訂・増補したものである。